平成３０年度学芸員等在外派遣研修実施報告書

三重県立美術館
鈴村　麻里子

平成３０年度学芸員等在外派遣研修の実施結果について、下記のとおり報告します。

１　研修テーマ
アメリカの美術館におけるアクセス・プログラム（とくに自閉症スペクトラム障がいの人々対象）の調査

２　研 修 期 間
平成３１年　２月　５日～平成３１年　２月２８日

３　研 修 概 要
（１）研修先の名称
メトロポリタン美術館（アメリカ合衆国、ニューヨーク州ニューヨーク市）

（２）研修の内容
1　研修先について
今回研修の受入先となったのは、アメリカ合衆国ニューヨークのメトロポリタン美術館（以下 Met と略す）教育部門、アクセシビリティーの部署（アクセス・コーディネーション）である。アクセス・コーディネーションでは現在 3 名のフルタイムのスタッフが働いており、そのグループの統括を行うのが、今回研修の受入窓口となってくださったシニア・マネージング・エデュケーターのレベッカ・マックギニス Rebecca McGinnis 氏である。彼女ら美術館の職員に加え、アクセス・コーディネーションには現在 16 名の契約エデュケーター[1]が所属し、37 名のボランティア[2]が登録しているという。
アクセス・コーディネーションでは、美術館教育を障がいの有無にかかわらずあらゆる利用者に享受してもらうことを使命とする Met がその目標を達成

[1] 彼らはフリーランスのエデュケーターで、Met での活動に加え、さまざまな独自の活動を行っている。美術作家であるエデュケーターも多いが、美術史のバックグラウンドを持つ人もいる。アクセス・コーディネーションのみならず、Met の教育部門の別部署（ファミリー等）のエデュケーターを兼任する人も多い。
[2] Met のボランティアは、「美術館部門ボランティア（Museum Department Volunteers）」と「ガイドツアー・ボランティア（Guided Tour Program Volunteers）」の 2 つに大別できる。アクセシビリティーに関わるボランティアは「美術館部門ボランティア」のうち「アクセス・プログラム・ボランティア（Access Program Volunteer）」である。彼らはアクセス・プログラムの運営補助を行い、年に数回程度専用の研修が行われる。

するために、アクセス・プログラムの企画・運営や、同館でのあらゆる催しに多様な人が参加できるような環境の整備、館内外との連携や調整、館内外への助言等を行っている。
＊Met のアクセス・プログラム
Met では、シリーズ化したプログラム（参加募集は毎回行う）を、それぞれ 3 か月に 1-3 回程度開催している。視覚障がい者、聴覚障がい者、認知症の人とその介護者、発達障がい・学習障がい・自閉スペクトラム症の人等、さまざまな対象に向けたプログラムの企画運営が継続的に行われている。3 か月毎にアクセス・カレンダー（イベント日程や障がいのある人が来館する際に有用な情報をまとめた冊子）が発行され、HP でも公開されている。
https://metmuseum.org/-/media/files/events/programs/progs-for-visitors-with-disabilities/accesscalendar.pdf

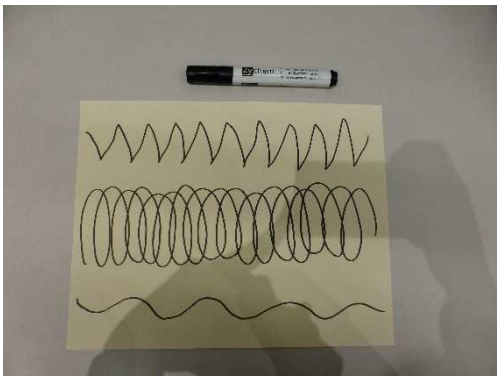
2　見学したプログラムについて
今回の研修の主たる目的は自閉スペクトラム症の人々を対象とするプログラムの調査であったが、3 週間の滞在期間中にはニューヨークの他の美術館でもさまざまな人を対象とするプログラムが行われていたため、可能な限り多くのアクセス・プログラムを見学した。そのうちの一部について、以下で個別に報告する。

１）　視覚障がい者向けのプログラム

① Met の「ピクチャー・ディス！：セント・オブ・ラブ」
Picture This!: Scent of Love
日時：2 月 14 日（木）14：00－15：30
対象：全盲の人または弱視の人
参加方法：事前予約が必要。美術館に電話またはメール。
流れ：
3 グループに分かれて、展示室をめぐりながらさまざまな感覚を使って Met のコレクションを鑑賞するプログラム。
筆者は 1 つのグループ（参加者 5 名、エデュケーター＝ファシリテーター1 名、ボランティア 2 名、インターン 1 名、スタッフ 1 名（車椅子利用者のサポート）、オブザーバー（筆者）1 名の計 11 名）に参加した。鑑賞した作品はローマのフレスコ画、ムガル朝の建築装飾と水盤、13 世紀イタリア（ドゥッチョ）の聖母子像、18 世紀フランス（フラゴナール）の絵画の 4 点。受付を済ませるとグループが知らされ、ボランティアから聴覚支援デバイス（Assistive Listening Device/以下 ALD）が配布された。アトリエでの簡単なグループ毎の自己紹介の後、展示室に移動。作品を前にスツールを広げて座り、まずエデュケーターが言葉による詳細なディスクリプションを行った。愛の香りというテーマに合わせて、作品に関連する詩の朗読や、調合されたアロマを浸したストリップ（紙片）の配布が行われ（例：ムガル朝の作品の前ではゲランの香水シャリマーの香りを楽しむ）、その香りか

ら作品世界を想像するアクティビティーも行われた。
集合・解散場所は Met 地下 1 階のアトリエ（Studio／制作のための道具や蛇口もあるワークショップルーム）だが、プログラムの開会・閉会は全体では行われず各グループのエデュケーターがそれぞれの裁量で行っていた。
※エデュケーターによるディスクリプションは作品の大きさから制作背景に及ぶ、非常に詳細にわたるものだった。アクセス・コーディネーションが作成している視覚に障がいのある人のための「言葉による記述」のガイドラインを拝見したところ、個性はあるもののどのエデュケーターもその基本方針に則ってトークを展開していることが窺えた。
※2 月の第 2 週はバレンタインデーを控えていたため、本プログラムのように愛にまつわるプログラムが各館で行われていた。
※このプログラムはアロマを浸したストリップの準備（乾燥を防ぐため開始直前に液に浸し密閉する）やその分類（グループ毎に必要な本数を袋に入れる）、展示室での配布や回収等、多くのアシスタントの手が必要で、ボランティア等がその役割を果たしていた。

② Met の「シーイング・スルー・ドローイング」
Seeing Through Drawing
日時：2 月 16 日（土）11：00－13：00
対象：全盲の人または弱視の人
参加方法：事前予約が必要。美術館に電話またはメール。
流れ：
こちらのプログラムは 10 年ほど前に Met のエデュケーターが開発し（Met のアクセス・プログラムのシリーズのなかでは新しい）、現在はエデュケーター3 名が担当している。各回 1 名がティーチングプランを作ってメイン・ファシリテーターを務め、他の 2 名がサポートを行う。
アトリエに入室した参加者は、まず中央の机に置かれた静物モチーフ（静物画に描かれることの多い食器等）のなかから気に入ったものを選び、スタジオ内の椅子に着席。この日の参加者は 21 名で、初めてこのシリーズに参加したのは 2 名。グループには分かれず、希望者には ALD が配布された。参加者が揃うと全体で自己紹介が行われた。



宙に円や線を描くエクササイズにつづいて、参加者にはスウェル・ペーパー（熱を利用した立体コピーに用いられる紙）と専用マーカーが配られ、表と裏で異なる紙の感触を指で確かめた後、ざらざらした面にマーカー（太さは 2 種類）を使用して紙を線で埋め尽くしたり、文様を繰り返し描いたり

した。また、スウェル・ペーパーを回転させながら四角形や静物モチーフを何層にも重ねて描くアクティビティーも行われた。スウェル・ペーパーはアトリエで専用の立体コピー機　を使ってボランティアやエデュケーターの手で手際よく立体化された。

開始 1 時間後には皆揃って展示室へスツールを持って移動。フアン・グリスの《チェックのテーブルクロスの上の静物》の前に椅子を並べて、参加者はエデュケーターによる記述を聞きながら画板にセットされた画用紙にドローイングを行った。

12：30 過ぎにアトリエに戻り、立体化された紙や、テクスチャーに個性のある紙をはさみで切り抜いて、四角形（＝テーブル）を描いたスウェル・ペーパーに、のりで貼り付けるコラージュが行われた。

※筆者のみならず、他館のエデュケーターや、大学院生等もオブザーバーとして参加していた。他の Met の土日開催のプログラムも同様。

③ レネー＆ハイム・グロース財団 The Renee & Chaim Gross Foundation での「タクタイル・トランスミッションズ：ファインディング・フォーム」

Tactile Transmissions: Finding Form

日時：2 月 19 日（火）18：00－19：30

対象：全盲の人または弱視の人

参加方法：スペースが限られているため事前予約が必要。美術館担当者に電話またはメール。

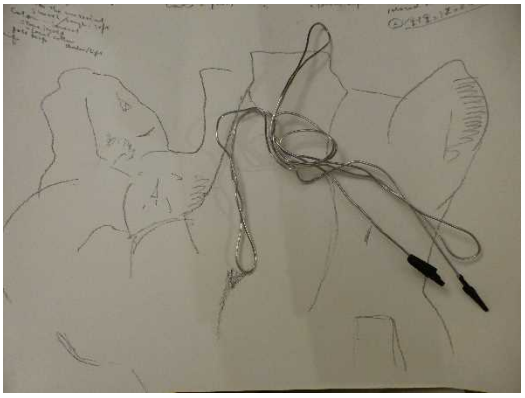
基本情報：

グリニッジ・ヴィレッジにあるグロース財団は、生前、彫刻家のハイム・グロースが暮らした家で、個人で観覧する場合は決まった日時に行われるツアーの予約が必要。同財団では、現在「ティーチング・スルー・タッチ」*Teaching Through Touch* という特別展が開催されている。同展は、グロース自身が彫刻の教育において触覚の使用を重視していたため、その意向を汲んだハンズオン展示となっている。財団は同展にあわせて、Met のエデュケーター4 名を迎え「タクタイル・トランスミッションズ」という視覚障がい者向けのプログラムを 2019 年 2－6 月に計 5 回開催。その第 1 回目に参加した。

流れ：

この回は 2 名のエデュケーターが前半と後半に分かれて進行役を務めていた。参加者は筆者含め 9 名。2 名のエデュケーターに加え、グロース財団の企画展担当者やスタッフも同席しサポートを行っていた。前半は、1 階のアトリエスペースで行われ、1 名のエデュケーターの

進行によって、グロースの木彫作品を前にしながら、参加者が自分の幼少期の木や森にまつわる思い出を語る自己紹介を行い、木彫作品を抱きしめたり、粘土や木片、彫刻のための道具に触ったりするアクティビティーを行った。
その後、特別展会場の 3 階に上がり、椅子に座ってもう 1 名のエデュケーターの進行で、まずは作品（母子像）を前に言葉による記述を聞きながら白い画用紙に作品の輪郭を描き、同じフロアにある作品を触察したり、描いたり、柔らかいワイヤーを用いて彫刻のかたちを捉えたりするアクティビティーを行った。



最後に数名の参加者が皆の前で感想を述べ、プログラムは終了した。
※この展覧会は彫刻作品そのものを触ることができる展示構成であるが、作品の素材や状態によって、手袋の装着や、ウェットティッシュの使用が個別に求められた。

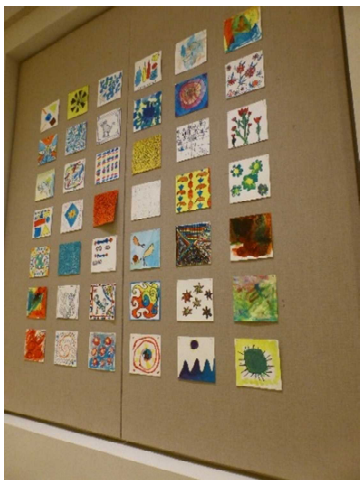
２）　発達障がい・学習障がい・自閉スペクトラム症の人向けのプログラム

① ニューヨーク・トランジット・ミュージアムの「サブウェイ・スルーズ（地下鉄探偵）」
Subway Sleuths
※このプログラムについては滞在中にプログラムそのものを見学することは叶わず、ミュージアムの見学と担当者からの聞き取りを行った。
基本情報：
このプログラムは自閉スペクトラム症の子どもを対象とした放課後プログラム。2-3 年生の児童対象のプログラムは水曜と木曜の放課後、4-5 年生の児童対象のプログラムは土曜の午前中に行われる。企画のきっかけは、電車に強い関心を示す自閉スペクトラム症の子どもに対し、博物館が何かアクションを起こす必要を感じたことだったという。プログラムの開発や運営には NYC Nest Project（ニューヨーク市教育局やニューヨーク大学 ASD Nest Support Program の連携による自閉症の子ども支援事業）が関わっている。
プログラムの構成、流れ：
このプログラムは 75 分プログラム×10 回（10 週）の放課後プログラムで、ミュージアム全体を教室として使用する。現在では 6 人の子ども×3 グループに分かれて実施しているとのこと。参加は有料。
それぞれのグループには言語療法士と自閉スペクトラム症専門のエデュケーター、さらにトランジット・ミュージアムのエデュケーターが

配置される。エデュケーター以外の博物館スタッフがこれに加わる場合もある。子ども：大人の比率は原則 2:1。参加希望者は、選考を経てプログラム参加者となる。この選考において、エデュケーターらは子どもの関心の所在や行動を観察し、グループ分けの参考にする。
ファシリテーターはグループに合わせたレッスン・プランを作成する。毎週のプログラムで子どもの様子を観察して記入される調査シートをもとに翌週のレッスン・プランの作成が行われる。外部コンサルタントによる中間評価も行われ、保護者アンケートも行われる。
※プログラム評価の回数、種類の多さや外部組織との継続的な連携が本プログラムの大きな特徴であると言える。
※本プログラムでは電車に関連する特有の語彙が用いられる。例えば、プログラムのオープニングのことを「乗車」と言ったり、グループの意見を「（1 両ではなく）6 両編成車の意見」と言ったりする。
※プログラムでは、自閉スペクトラム症の人のためのさまざまなツールが用いられる。触覚ボール、残り時間が一目で分かる時計、細かい手作業が苦手でも使いやすいはさみ等。

※トランジット・ミュージアムには過去にニューヨークの地下鉄で使用されていた車両が展示されている。当プログラムでは、比較的新しい車両を使用して、参加者が実生活で他人と一緒に地下鉄に乗るための練習も行われている。

② Met の「ディスカバリーズ：ダークネス・アンド・ライト」
Discoveries: Darkness and Light
日時：2 月 24 日（日）11：00－12：30／14：00－15：30
対象：発達障がい・学習障がい・自閉スペクトラム症の人。11：00－12：30 の回は 5－17 歳の子ども、14：00－15：30 の回は 18 歳以上の人やその家族、友人。
申込方法：メールまたは電話による事前申込。
「ディスカバリーズ」について：



2018 年はこのプログラム誕生の 30 周年にあたるため、2019 年 2 月中旬まで Met 館内のフリースペースにおいて、2018 年にプログラム参加者が制作した作品やプログラム内容を紹介する展示が行われていた。参加者の作品（名前あり）、各ワークショッププログラムを紹介するパネル、プログラムの様子を写した写真のスライドショーで展示が構成されていた。
会場パネルによれば、「ディスカバリーズ」の特徴は、当事者とその家族や友人が、一緒になって世代の違う人々と語らったり、さまざまな感覚を使用する体験をしたりするという点である。また、毎回テーマは異なるものの、プログラムの構成がある程度一貫している点もこのプログラムの特徴の一つである。
なお、この「ディスカバリーズ」のプログラムに参加するためのソーシャル・ナラティヴ[3]も HP で公開されており、はじめてプログラムに参加する自閉スペクトラム症の人やその家族も不安やストレスが軽減できる工夫がなされている。
また、このプログラムは、現在は主に 3 名のエデュケーターによって進行されている。1 名のエデュケーターがその回のリード・エデュケーターを務め、レッスン・プランを作成する。
当日の流れ：

アトリエに入室した参加者は、まず机に置かれたさまざまな素材（色の濃い／薄い触感がユニークな素材。例えば、ナス、ジャガイモ、キウイ、マッシュルーム、白と黒の羽根、貝殻など）を見て触れる活動を行った。続いてプログラムのテーマ「闇と光」について、どのようなことが想像できるか意見を言い合い、机の上の素材の色や触感について感想が交わされた。
この日はエデュケーターによって白と黒のキャンバスに感じたことを描くデモンストレーションが行われた。（「この羽根の触り心地を絵にすると？」「雨の日の空の色はどんな色？」）その後、グループ（昼の部：4 グループ、午後の部：3 グループ）が発表されると、それぞれのグループがアトリエから展示室へと向かって出発した。な

[3] 発達障がい者のための、ソーシャルスキルを文章や写真・イラストで記述したツールのこと。美術館来館のためのソーシャル・ナラティヴは「今日は～美術館に行きます」「入口に入ってから警備員にバッグの中身を見せます」という風に美術館で利用者が体験することを文章と写真で紙芝居のように表しているものが多い。

お、展示室への出発前には展示室で守る約束の確認が行われた。例えば、作品には触らない、食べたり飲んだりしない、他人の写真を許可なく撮らない等。
筆者は昼の部と午後の部で異なるエデュケーターのグループに参加。見学先はいずれもオランダ絵画の特集展示（「イン・プレイズ・オブ・ペインティング」*In Praise of Painting*）。ここでは 5－17 歳向けの昼のプログラムについて報告する。
グループには 2 組の家族が参加（参加者 6 名（2 家族）、エデュケーター1 名、アシスタント 1 名、オブザーバー（筆者）1 名）。フェルメールの《眠る女》を見ながら（この回は椅子を使用せず床に座った）「何が描かれている？」「どんな場所？」「どんな人？」等の対話がエデュケーターと参加者の間で行われた。白と黒の紙に、白と黒の鉛筆型コンテで作品のスケッチを済ませた後、風景画展示コーナーを鑑賞。プログラム当日のグレーの空の色に近い色の空を探し、再びスケッチを行った。発言やスケッチをためらう参加者には、エデュケーターが作品に描かれたモチーフに関連するツール（布等）を手渡し、触ることも勧めていた。
アトリエに戻ると、参加者は白か黒のキャンバスを選び、白や黒の絵具で思い思いに絵を描いた。なお、アトリエには鑑賞した作品画像のコピーも用意されており、希望する参加者はそれを見ながら制作することもできた。最後に希望者が自身の作品を他の参加者に紹介。
※昼の部と午後の部は、構成じたいに大きなちがいはなかったが、年齢層が異なるためファシリテーターの言葉の使い方等には差異が見られた。午後のツアーではリラックスするためのエクササイズが展示室に向かう前に行われ、参加者はスツールを展示室に持参した。
※当日アトリエには参加者のためにセンサリー・キットが用意されていた。なかなか席に着けない子どもに対してそれらのキットが手渡されていた。
※「ディスカバリーズ」と「メット・エスケープス」（後述）は、キャンセル待ちリストができる人気のあるプログラム。大人の発達障がい者対象のプログラムは他館での類似プログラムが少ないため、参加希望者にとっても希少な機会なのでは、というのが美術館スタッフの見解。

③ （番外編）Met のパートナーシップ団体のための鑑賞プログラム
日時：2 月 13 日（水）12：30－14：00、14 日（木）11：00－12：30
対象：パートナーシップ団体 2 組（ともに発達障がい、知的障がいの成人）。13 日は 9 名、14 日は 6 名（いずれも引率者含む）が参加。
基本情報：
Met のアクセス・コーディネーションでは、日時を定めて参加者を募るタイプのプログラムに加え、特定の障がい者支援団体とパートナーシップを結び、定期的に来館する彼らに特別なプログラムの提供を行っている。

滞在中に、そのような団体の受入機会があったので、2 回見学をさせていただいた。エデュケーターは同一のプログラムだと説明していたが、対象も時間も異なるため、その違いにあわせて臨機応変にプログラムの改変が行われていた。
流れ：
別室（アトリエではなく教室。創作可能な設備を持つ、少し小さめの部屋）に団体を迎えた後、画板や画用紙、椅子を持って展示室に移動し、特別展「アート・オブ・ネイティヴ・アメリカ」*Art of Native America* からいくつかの作品を鑑賞。衣服の文様に着目して、気に入ったものを展示室で水彩色鉛筆を使ってスケッチし、教室に戻って水溶性クレヨンで加筆し、最後に水を含ませた筆を使う「ドローイングをペインティングにする」というプログラム。
この団体受入は Met のエデュケーターが 1 名で対応しており（彼女は「ディスカバリーズ」のファシリテーターを務めることも多い）、ボランティアやインターンによるサポートは行われていなかった。

３）　認知症の人とその介護者向けのプログラム
介護者（ケアパートナー）は、認知症患者の家族に限られない。このプログラムでは認知症患者本人のケアはもちろんのこと、介護者の負担軽減が大きな目標となっている。

① ルービン美術館の「マインドフル・コネクションズ」
Mindful Connections
日時：2 月 15 日（金）14：00－15：00（13：30－14：00 はお茶の時間）
対象：認知症の人とその介護者
参加方法：専用フォームへの入力、登録が必要。認知症の人の年齢や症状の程度等も入力する。
流れ：
プログラム開始の 30 分ほど前から、参加者は美術館の入口に近い館内カフェに集合して、再会したスタッフや参加者と語りながらお茶を飲む。参加者が揃った 14：00 頃から 2 グループに分かれて上階の展示室へ移動した。筆者は 1 グループ（参加者 2 人×3 組、エデュケーター2 名、ボランティア 2 名、オブザーバー（筆者）1 名）の活動を見学。グループ分けは、参加者の認知症の進行の程度も考慮して決めているとのこと。展示室移動後は、まず 2 名のエデュケーターが作品を前に対話による鑑賞を行う。ルービン美術館が扱うのは主にヒマラヤの美術であるが、この日は仮面、曼荼羅、グリーン・ターラの真鍮像を鑑賞した。エデュケーターの問いかけはシンプルで答えやすいものになるよう工夫されており、例えば、「この人はどんな人だと思いますか？」「どこからそう考えましたか？」「この顔が好きですか？」等の質問が投げかけられていた。また、タブレットを使って関連する映像を参加者に見せる等、さまざまな情報を提供しながら、プ

ログラムが進められていた。
※2012 年の終わりからスタートしたプログラム。

② ブルックリン美術館の「ブルックリン・アフタヌーンズ」
Brooklyn Afternoons
日時：2 月 19 日（火）14：00－15：30
対象：記憶障がいのある人と、彼らのケアをする人たち
参加方法：専用ページから登録。
流れ：
このプログラムは、通常休館日に開催されるが、今回は特別展開催中で変則スケジュールになっていたため、コレクション展示室のみ閉室する曜日に、閉室中の部屋で鑑賞ツアーが行われた。鑑賞したのは特集展示「ハーフ・ザ・ピクチャー」*Half the Picture*。まず美術館の入口で受付を済ませた参加者はエデュケーション・ルームに案内され、そこで他の参加者たちと顔を合わせる。2 グループに分かれ、各グループ 1 名のエデュケーターがプログラムのファシリテーションを行った。筆者が見学したグループには 2 名×4 組が参加。閉室中の展示室のため、あらかじめ座って鑑賞する作品の前にはスツールがセッティングされていた。美術館スタッフはそれぞれのグループの様子を見ながら、途中で抜けたり合流したりする参加者の誘導や、進行のフォローを行っていた。ボランティアのサポートなし。
筆者が参加したグループでは最初にキャリー・メイ・ウィームズの写真を鑑賞し、対話による（「どんな人たち？」「どんな場面？」「壁に貼られている写真／絵は？」等）鑑賞が行われた。
次に展覧会タイトルの由来にもなっているゲリラ・ガールズのポスターの前に移動。ここでは、まず参加者はめいめい自由に鑑賞し、同シリーズのうち最も印象に残った作品を選んだ。希望者はグループの他のメンバーと選んだ作品やその理由を共有。
最後にジュディ・シカゴの《ディナー・パーティー》を鑑賞。この鑑賞は、参加者（ペア）がそれぞれ思い思いのペースで作品を見るというスタイルで行われた。
鑑賞後、皆でエデュケーション・ルームに戻り、他の参加者との会話や、お茶とお菓子を楽しみながら交流を深めた後、流れ解散となった。
※初めての参加者が数組含まれることが多いが、この日は皆 2 回目以上の参加者だったとのこと。

③ Met の「メット・エスケープス―ギャラリー・ツアー」
Met Escapes—Gallery Tour
日時：2 月 25 日（月）14：00－15：30
対象：認知症の人とその介護者
参加方法：事前予約が必要。美術館に電話またはメール。
流れ：

「メット・エスケープス」は 2007 年から 1 年かけてコロンビア大学メディカル・センターの協力を得て開発され、2008 年 6 月にスタートしたプログラム。本プログラムには、アトリエでの創作活動が中心となる「アート＝メイキング・ワークショップ」や、触覚を使う鑑賞が可能な「タッチ・コレクション」を活用するプログラムに加え、「ギャラリー・ツアー」という複数のスタイルがあるが、今回参加した 2 月のプログラムは、展示室での作品鑑賞が中心となる「ギャラリー・ツアー」であった。

集合場所はアトリエではなくレクチャーホール。アクセス・コーディネーションのスタッフが受付と同時に参加者にグループを示し、参加者は 6 つのグループ（1 グループあたり 3－4 組程度が参加）に分かれて着席した。「ピクチャー・ディス！」と同様、参加者の揃ったグループから各グループのエデュケーターの進行で自己紹介が行われ、スツールを持って展示室に向かった。筆者が参加したグループの構成は参加者 2 名×4 組、エデュケーター1 名、オブザーバー（筆者）1 名。アシスタントは筆者のグループには不在。

「ディスカバリーズ」と同様、この日もオランダ絵画の特集展示を鑑賞。フェルメールの《眠る女》の前で対話による鑑賞（「どのような女性？」「何が描かれている？」等）とスケッチを行い、続いて同展の静物画展示コーナーにて、描かれたモチーフや描き方を比較しながら鑑賞し再びスケッチを行った。参加者のうち 2 組の介護者はスケッチを行わなかった（活動への参加には本人の意志が尊重され強制されない）。

展示室からレクチャーホールに戻り、グループ毎に解散。解散後、各エデュケーターは参加者の様子をアクセス・コーディネーションのスタッフに報告していた。

※この日は比較的展示室が混雑しており、部屋の奥行きも狭いことから、少人数であっても車椅子利用率の高いグループは少し場所移動に苦労していた。

※自閉スペクトラム症の人向けのソーシャル・ナラティヴと同様、認知症の人の介護者のための来館のヒントも、Met の HP で閲覧することができる。

3 その他、個別来館者への対応

1）センサリー＝フレンドリー・キット

Met が図書室にて貸出を行っている自閉スペクトラム症の人向けのセンサリー＝フレンドリー・キットについて紹介する。バッグの中身は以下のとおり。

・ソーシャル・ナラティヴ
個別に来館する家族の自閉スペクトラム症の子ども向けのソーシャル・ナラティヴ。オンラインでも公開されている。
https://metmuseum.org/-/media/files/events/programs/progs-for-visitors-with-disabilities/social-narrative-children.pdf
・センサリー・フレンドリー・マップ
混雑する／しないエリア、音が大きい／静かなエリア、明るい／暗いエリアを色分けした館内地図。
https://metmuseum.org/-/media/files/events/programs/progs-for-visitors-with-disabilities/sensory-friendly-map.pdf
・マイ・メット・ツアー
自閉スペクトラム症の来館者が、Met 見学の計画を立て、実際にどの展示室に行ったかチェックするためのリスト。マジックテープが付いていて、貼ったり剥がしたりできるようになっている。
https://metmuseum.org/-/media/files/events/programs/progs-for-visitors-with-disabilities/my-met-tour.pdf
・触覚ツール（とげのあるスティック、やわらかいボール／感覚遊びができるツール）
・1 分が計れる砂時計（時間の経過が一目で分かるツール）
・膝の上に乗せる重みのあるパッド
・その他、館内マップ、ファミリーマップ、自閉スペクトラム症の子ども向けのアクセス・プログラム（ディスカバリーズ）の案内資料
※人混みや大きな音を苦手とする自閉スペクトラム症の人も多いため、Met ではセンサリー・フレンドリー・マップを公開するだけでなく、大きなイベントを館内で開催する際には特定の場所を「クワイエット・スペース」として開放している。2 月 9 日（土）に行われた旧正月を祝う「ルナ―・ニュー・イヤー・フェスティバル」でも、展示室 2 部屋がクワイエット・スペースに指定され、絵本やツールが置かれ、ボランティアが常駐して自閉スペクトラム症の子ども（このスペースの利用者は彼らに限られない）も安心してくつろげる工夫がなされていた。

２）オンラインツール
自閉スペクトラム症の利用者のための Met のオンラインリソースは非常に充

実している。上に挙げたソーシャル・ナラティヴだけでも 6 種類のファイルがあり、アクセス・プログラムには参加できなくても、彼らにとって必要な情報が常時オンラインで入手できるようになっている。2014 年頃に開発・公開されたとのことだった。
https://metmuseum.org/events/programs/access/visitors-with-developmental-and-learning-disabilities/for-visitors-with-autism-spectrum-disorders

（3）研修の成果
個々のプログラム見学で得たことは上にも挙げているが、研修全体を通して改めて気づいたこと、実感したことを以下に記す。

・今回見学をしたプログラムについては、エデュケーターが対応できる参加者の数やスペースが限られているという理由から、ほぼすべてのプログラムで事前予約が参加要件とされていた。この事前予約のシステムは、美術館が、参加者自身やその家族の関心の範囲、得意・苦手とすることを事前に把握できるという大きなメリットがある。Met のプログラムについては、プログラム前後にエデュケーター同士の、またエデュケーターとアクセス・コーディネーションのスタッフとの間で参加者情報の共有が行われていた。このような、一人一人の個性を考慮した丁寧なヒアリング、関係者間の情報共有が、プログラムの改善、参加者への継続支援に大きく貢献していると考えられる。

・展示室閉室中に他の来館者不在の空間で開催されるプログラムもあれば、開室中に他の来館者と一緒に展示室を利用するプログラムもあった。それぞれメリットとデメリットがあるが、開室中に開催されるプログラムは、参加者が通常の来館時間に美術館のプログラムに参加できたという自信を得ることにもつながるのではないかと感じた。

・一部のプログラムは当事者のみの参加が許されていたが、その一方で家族や友人、ケアパートナーの参加が勧められるプログラムもあった。これについても両者にメリット、デメリットがあるが、後者の場合、障がいのある人の周囲の人々が単なる「付き添い」ではなく、彼ら自身が美術を楽しむことも目標に定められていた。見学した限り、こうした家族や介護者同士の交流が、プログラムへの継続参加を通して深まっているケースも多いように思われた。

・今回の研修では、とりわけ視覚障がい者向けのプログラムや、認知症の人とその介護者向けのプログラムに数多く参加した（これらは開催頻度の高いプログラムでもある）。その結果、複数の美術館、プログラムで何度も同じ参加者に遭遇し、さまざまな美術館に出かけ、複数のアクセス・プログラムを楽しむ利用者が多いことも実感できた。

・各館でプログラムの構成も異なれば、参加者受入の雰囲気にも個性があるものの、エデュケーター同士の情報交換や連携は活発に行われていることが窺えた。何件かのプログラムでは、他館のエデュケーターがオブザーバー／アシスタントとして参加

し、自館の活動の改善のために調査を行っていた。

・プログラム開発のみならず、ソーシャル・ナラティヴの作成や公開、その他障がいのある人にとって必要なリソースのウェブ上での公開も、アクセシビリティー向上には不可欠であると言える。

・今回の研修では上に挙げたプログラム以外に、Met のアクセス・コーディネーションが関わるミーティングも何度か見学させていただいた。例えば、特別展にあわせて開催するアクセス・プログラムの打合せには、エデュケーターとキュレーター、コンサヴァター（触覚を使うプログラムの場合、素材のスペシャリストであるコンサヴァターがツールを用意したり助言したりすることもある）が同席し、作品を前にどのような流れでツアーを行うか打合せがなされていたし、教員研修のためのミーティングでは学校連携の担当者がアクセス・コーディネーションから助言を得ていた。
アクセス・コーディネーターが美術館において、障がいのある人への対応のスペシャリストとして認知され、教育部門内にとどまらず、あらゆる部署と連携し、スタッフの意識改革や美術館全体のアクセシビリティー向上に尽力している様子を垣間見ることができ、有意義であった。

（4）研修成果の活用計画

筆者の所属館は「誰もが利用しやすい環境」の整備を「美術館のめざすこと」に定めているにもかかわらず、ハード面においてもソフト面においても、すべての利用者に充実した美術館体験の機会を提供するには不足しているものが多い。従って、研修成果の活用のためにできることは山のようにあるが、まずは、館内のスタッフと情報を共有し、館外との連携や調査を重ねて改善に向けた努力をしていきたい。具体的な活動としては、以下のものが挙げられる。
＜新規＞
・所属館スタッフとの情報共有
・ALD 等、有用なデバイスの入手
・オンラインリソースの開発、公開
・他機関との連携によるアクセス・プログラムの開発
・施設改修のための調査
＜継続＞
・アクセシビリティー向上のための調査
・館内設備や開催プログラムのアクセシビリティーのチェック
・他館のエデュケーターとの情報共有、連携
・特別支援学校との連携